

『平家物語』における多田行綱

——「裏切り者」と言われた男の素顔——

清水 由美子

要旨 『平家物語』の中では鹿ヶ谷での密議の密告者として有名な多田行綱であるが、近年、義経の武功譚として有名な一の谷合戦での鶴越の逆落としを行つた人物として注目されるようになってきた。行綱は、平氏の運命を変える二つの大きな局面で重要な働きをした人物であると考えられるのである。そうした彼について、『平家物語』での造型を見極め、これまで行われてきた歴史的研究も併せて考察することで、後白河院や近衛家との密接な関係が彼の行動の背後にあることが明らかになった。『平家物語』での造型はそれを受けたものだったのである。

はじめに

今回のプロジェクトは「歴史叙述と文学」というタイトルのもとで実施されたものである。文学作品において、歴史的な事柄や歴史を動かした論理がどのように「叙述」されているのか、ということが大きなテーマかと思われる。

しかし、筆者がこれまで取り組み、またこのプロジェクトに参加することで新たに考えてきたことは、むしろ、「叙述」されなかった歴史と言うほうが正確かもしれない。筆者は、主に軍記文学作品の中で、史実から乖離して創作された記事の、史実からの距離や、また、同一の作品における諸本間の流動の様相を通して、その背後にある歴史的背景に迫る、という手法を取ってきたからである。

作者、あるいは作者たち、あるいは編者たちが、ある歴史的出来事にもとづいた記述をしながらも、史実と乖離していった時、または、その記述が享受されるなかで変容していった場合に、その背後には必ずなんらかの歴史的事情

があつて、そこで掬い取られるものこそが「叙述」されない歴史的眞実なのではないか、という立場に立っているからである。つまり、筆者にとつての「歴史叙述」とは、物語の創作や流動の背後に身を潜め、掬い取られるのを待っているもの、とでも言つたらよいだろうか。

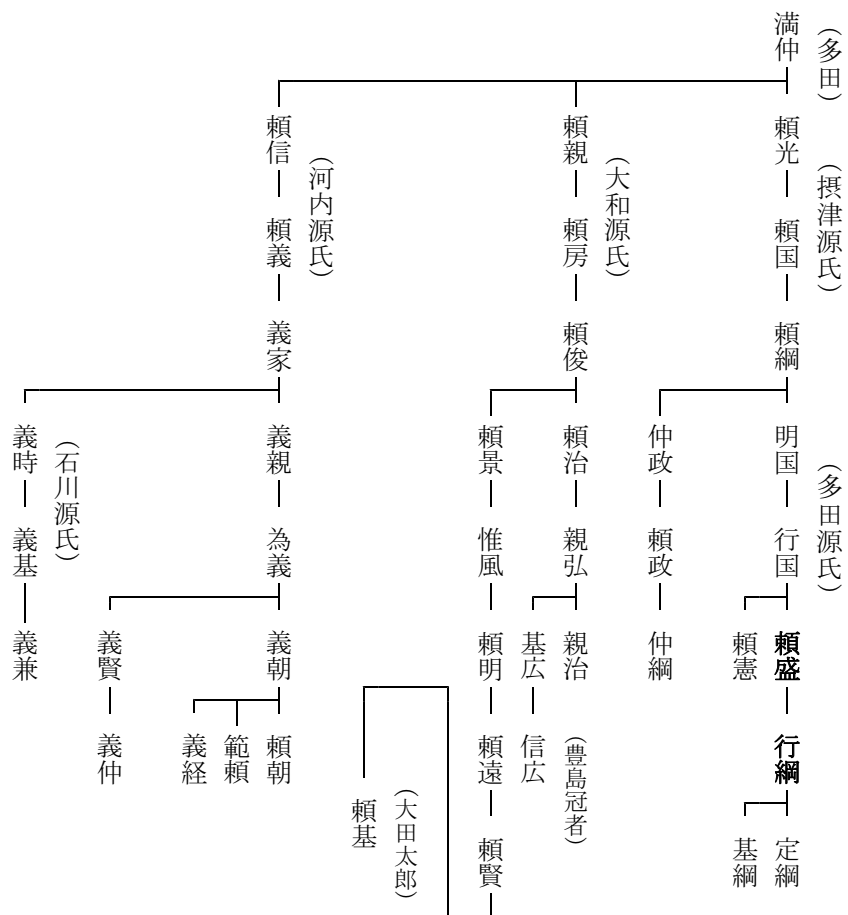
今回、筆者が掬い上げようとしているのは、多田行綱という人物の描かれ方の背後にある、治承・寿永の内乱における歴史の一断面である。近年、治承・寿永の内乱における一連の出来事に関する研究の中で、これまでの定説を覆す新たな事実や見方が報告されているものに、安元三年（一一七七）に起こった鹿ヶ谷の陰謀をめぐるものと、寿永三年（一一八四）の一ノ谷合戦における、いわゆる源義経の鶴越の坂落としをめぐるものがある。実は、この二つの出来事に関わり、新たな見方の是非を考える際の際の鍵を握っているとも言えるのが、この多田行綱という人物なのである。鶴越の坂落としに関しては、物語では名前さえ挙がらないにも関わらず、である。

多田行綱という人物はどういう人物なのか。どんな行動を取ったのか。『平家物語』ではどのような描かれ方をするのか。その描かれ方の背後には、彼を

めぐるどのような歴史的事実があったのか。本論考は、そうしたことを通して、「叙述」されなかった歴史の一断面に迫ってみようとするものである。

一、多田行綱という人物

多田行綱は、次に挙げた略系図でもわかるように、摂津源氏の中でも、頼政につながる一流と分かれ、多田源氏とも称されるが、頼政らの一流が治承四年の以仁王の乱で滅びるので、以後、諸史料においても、『平家物語』においても摂津源氏多田行綱という呼び方をされている。逆に、治承・寿永の内乱の後半にかかわる記述において、摂津源氏とのみ言われる場合も行綱とその係累をさしていると考えてよい。義仲の侵攻以降、行動を共にしていると見られるのが、豊島冠者と呼ばれる信広、大田太郎とされる頼基などであるが、彼等は大多田源氏と総称される一派ということになる。



次に、諸史料で確認できる行綱の行動を年表にまとめてみると、以下の通りである。

康治二年（一一四三） 行綱、誕生か？
仁平三年（一一五三） 七月 藤原基実のもとで元服（『兵範記』）。
閏十二月 父頼盛、その弟頼憲と遺産をめぐって対立

（『本朝世紀』）。

保元元年（一一五六）七月

保元の乱。父頼盛は後白河方に参加（『兵範記』）、叔父頼憲は崇徳方で参戦（『保元物語』）。

保元二年（一一五七）八月

行綱、基実の前駆に加わる（『兵範記』）。

安元三年（一一七七）六月

鹿ヶ谷事件。行綱は密議に加わるが、清盛に密告する（『百鍊抄』、『愚管抄』、『保暦間記』）。このあと、安芸国に流罪（『尊卑分脈』）。

寿永二年（一一八三）七月

平氏都落。行綱は義仲に同調し、摂津・河内で横行し舟を押さえ、平家に打撃を与える（『玉葉』、『吉記』）。

後白河院が院宣を行綱に下し事情聴取（『吉記』）、剣璽の安全確保を命じる（『玉葉』）。

十一月

法住寺合戦。行綱は後白河院方で参戦（『吉記』）。

十二月

行綱、多田庄に立籠もり義仲に対抗（『玉葉』）
一の谷合戦。行綱が山側から寄せ、最初に山手落とす（『玉葉』）

寿永三年（一一八四）二月

元暦二年（一一八五）六月

頼朝、多田庄を没収（『多田神社文書』）。

十一月

行綱、豊島冠者と河尻で義経を迎撃（『吾妻鏡』）。

生年に関しては、普通辞典類では未詳とされているようであるが、次の『兵範記』の元服記事によるならば、康治二年（一一四三）と判断できる。

晩頭参殿下、豫仰云、非藏人頼盛子、今夜於三位中将御方可加元服、申賜御装束、又可用意加冠具等者、仍隨身所参人也、頃之頼盛并子童（十一）参上、先召両方御前御覧、次西面御曹司供堂燈、人々少々参集、先下給御

装束、（女郎花薄物狩衣、蘇芳織單、二藍亀甲文織物指貫、紅張袴、御帶、御扇、以上裏絹、平裏、以上皆古装束也）於閑所着之、（不差紐）、次敷菅圓座二枚、（奥外、冠者、理髮座等也）、次冠者参奥座、親昵者高範相副扶持之、次置加冠具、先烏帽子、（置柳筥、安冠者右方）、次泔器、（入水、居柳筥、不加蓋并火坑、安冠者左方）、次打亂筥、（入木結櫛二枚、髪搔、笄刀、檀紙三枚、不及櫛巾、依内々事也、安中央、以上五位六位役之、役人布衣、不及衣冠）、此間中将殿御坐母屋際障子邊、殿下密々同御覧歟、次下官依仰勤理髮役、高範、邦綱、差脂燭、召内藏人長定、次伊賀守信時朝臣加冠役、次冠者下前庭再拜、次召御前、又被参進殿下御方了、次下官退出。

（仁平三年（一一五三）七月十六日）

この記事に登場する「非藏人頼盛子」という十一歳の「子童」が、頼盛の嫡子であった行綱である可能性が高いと考えられるからである。さらに、年表にも記した通り、同じ『兵範記』によると、保元の乱の翌年の保元二年に、行綱が基実の前駆として仕えていたことがわかり、それは既によく知られているのであるが、本稿では、この元服記事も行綱と基実ら近衛家との深い関わりを示すものとして重視しており、それに関しては、後ほどもう一度この記事を参照することになる。

その後、鹿ヶ谷の陰謀に関わったことが『愚管抄』などに見え、義仲の侵攻とそれに伴う平氏都落ちでは、義仲方につきつつも、法住寺合戦では後白河方に参加して敗走、多田庄に立て籠もったことが分かっている。そして、一の谷合戦では、義経方の搦手軍に参加していたことが『玉葉』によって知られるが、次章で紹介するように、『平家物語』では、この一の谷合戦において行綱の名前は見えない。

さらに、平氏滅亡から三か月ほどたったころには、頼朝のために所領を没収されたことが見え、その年の十一月に、頼朝と対立して都から退いた義経を攻めたとの記事が、次に示すように、『吾妻鏡』にはあるが、『玉葉』にはない。

この点については、『平家物語』諸本の書き方も分かれる所である。

『吾妻鏡』文治元年十一月五日

…今日、豫州河尻に至るの処、摂津国源氏多田藏人大夫行綱、豊嶋冠者等前途を遮り、聊か矢石を發す。豫州懸け敗る間、挑戦すること能はず。然れども、与州の勢多く以て零落し、残る所幾ばくならずと云々。

『玉葉』文治元年十一月四日条

…今日又、武士等義経ヲ追イ行クト云々。伝エ聞ク、昨日、河尻辺ニ於イテ、太田ト合戦シ、義経利ヲ得テ、打チ破リ通り了ンヌト云々、

同八日条

…伝ヘ聞ク、義経、行家等、去ル五日夜船ニ乗り、大物辺ニ宿ル。追イ行ク武士等、近辺ノ在家ニ寄宿スヘ手島冠者、并ビニ範季朝臣息範資等大將軍ト為ルト云々。件ノ範資儒家ニ生マルト雖モ、其ノ性勇士ニ受ケ、之ニ加ハル。蒲冠者範頼親昵ノ間、在京ノ範頼ノ郎従等ニ催具シ、行キ向カフト云々、未ダ合戦セザルノ間、夜半ヨリ大風吹き来タリテ、九郎等ノ乗ル所ノ船、併シナガラ損亡シ、一艘トシテ全キタル無シ、……

二、『平家物語』における多田行綱

(1) 鹿ヶ谷の陰謀関連記事での描かれ方

多田行綱といえ、何といつても、『平家物語』で描かれる反平家の動きの端緒であつた鹿ヶ谷の陰謀での行動が有名である。平氏一門の官職占有に不満をつのらせた藤原成親をはじめとする人々が、鹿ヶ谷にあつた俊寛の別荘に集まり、そこに後白河院も加わつて反平家の密談をしたのだが、そこに武士として勧誘され白布を与えられて参加を表明していた行綱が、清盛の当時の権勢を恐れるあまり、清盛に密告し、それによつて陰謀が明らかになり、成親以下の

参加者が次々と捕らえられるという内容である。延慶本『平家物語』では次のように語られる。

成親卿ハ、山門ノ騒動ニ依テ、私ノ宿意ヲバ押ラレケリ。ソモ内議支度ハサマズナリケレドモ、議勢計ニテ、其事可叶トモミヘザリケリ。其中ニ多田藏人行綱、サシモ契深タノマレタリケルガ、「此事無益ナリ」ト思心付ニケリ。サテ弓袋ノ料ニ、新大納言ヨリ得タリケル五十端ノ布共、直垂小袴ニ裁縫テ、家子、郎等ニキセツ、目打シバタ、キテ居タリケルガ、思ケルハ、「情ヲ平家ノ繁唱スル有様ヲ見ニ、当時輒ク難シ傾ケ。大納言ノ語ハレタル兵イク程ナシ。無由コトニ与力シテケリ。若此事漏ヌル物ナラバ、誅セラレム事無疑。甲斐ナキ命コソ大切ナレ。他人ノ口ヨリ漏レヌ先ニ、返中シテ、命生ナム」ト思テ、五月廿九日夜打深テ、大政入道ノ許ヘ行向テ、「行綱コソ可申事アテ参テ候ヘ」ト申ケレバ、「常ニモ参ヌ者ノ、只今夜中ニ来タルコソ心得ネ。何事ゾ。聞」トテ、平權守盛遠ガ子、主馬判官盛国ヲ出サレタリ。「人ヅテニ可申事ニ非ズ。直ニ見参ニ入テ申ベシ」ト申ケレバ、入道、右馬頭重衡相具テ、中門廊ニ出合テ、入道宣ケルハ、「六月無礼トテ紐トカセ給ヘ。入道モ白衣ニ候」トテ、白帷ニ白大口フミク、ミテ、スバシノ小袖打カケテ、左ノ手ニ打刀ヒサゲテ、蒲打輪仕ハル。「此夜ハマウニフケヌラム。イカニ、何事ニオワシタルニカ」。行綱近タト指寄テ、小音ニナリテサ、ヤキ申ケルハ、「イト忍テ可申事候テ、昼ハ人目ノツ、マシサニ、態ト夜ニマギレテ参テ候。院中ノ人々兵具ヲト、ノヘ、軍兵ヲ召集ラル、事ヲバ知食レテ候ヤラム」ト申ケレバ、「イサ、ソレハ山ノ大衆ヲ可被責トコソ承レ」ト、イト事モナゲニ宣ケレバ、「其儀ニテハ候ハズ」トテ、日来月来、新大納言ヲ始トシテ、俊寛ガ鹿谷ノ山庄ニテ、ヨリアヒク、内議支度シケル事、「其レハトコソ申候シカ、カクコソ申候シカ」ト、人ノ吉事云タルヲバ我申タリシト云、我惡口シタリシヲバ人ノ申タルニ語リナシ、五十端ノ布ノ事ヲバ一端モ云出サズ、有ノマ

「ニハ指過テ、ヤウくサマくノ事共取付テ、細ク申ケレバ、入道大ニ驚テ宣ケルハ、「保元、平治ヨリ以来、君ノ御為ニ命ヲ捨ル事、既二度々也。人々イカニ申トモ、キミ君ニテ渡ラセ給ハバ、争カ入道ヲバ子々孫々マデモ捨サセ給ベキ。乍恐君モクヤシクコソ渡ラセ給ハムズラメ。抑此事ハ院ハ一定被知食タルカ」ト宣ケレバ、「子細ニヤ及候。大納言ノ軍兵被催候シモ、院宣トテコソ催サレ候シカ」。其外モ様々ノ事共云チラシテ、「暇申テ」トテ帰ニケリ。入道大声ニテ侍共ヲヨビテ、旬リシカラレケル気色、門外マデ聞ヘケレバ、行綱、慥ナル証人ニモゾ立トテ、「穴怖シ」トテ、野ニ火ヲ付タル心地シテ、人モヲハヌニ取袴ヲシテ忿ギ馳帰リヌ。(巻二・七「多田藏人行綱仲言事」)

このように行綱は、『平家物語』においては成親らを破滅へと導き、さらには清盛の悪行を招く大きな役割を果たす人物として描かれているわけであるが、鹿ヶ谷事件に関しては、いわゆる鹿ヶ谷の密議自体の存在を疑い、後白河院及び近臣たちの山門との対立が激化していく中で、山門との関わりの深かった清盛が、巻き込まれることを回避するために主戦派だった成親らを捕縛したというのが真相だったとする説が主流になっていると思われる。これについては、多くの考証がなされているが、その中でも高橋昌明は、『顕広王記』の「法勝寺執行俊寛解官。事の発りを尋ねれば、事を大衆に寄せ、謀りて 禅定相国を誅さんと欲すと云々」という記事に着目し、この辺りが真相ではないかと説明する^①。こうした見解は説得力があると思われる。

ただし、そうした説が史実であるとなると、問題となるのが、『愚管抄』、『百鍊抄』、『保暦間記』の記事をどのように考えるかである。『平家物語』での記事を作成であると考えるのは首肯できるとしても、これらの史料には、例えば『愚管抄』に、

コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲ガ末孫ニ多田藏人行綱ト云シ者ヲ召テ、

「用意シテ候へ」トテ白シルシノ料ニ、宇治布三十段タビタリケルヲ持テ、平相國ハ世ノ事シオホセタリト思ヒテ出家シテ、攝津國ノ福原ト云所ニ常ニハアリケル。ソレヘモテ行テ、「カ、ル事コソ候へ」ト告ケレバ、ソノ返事ヲバイハデ、布バカリヲバトリテツボニテ焼捨テ後、京ニ上リテ安元三年六月二日カトヨ、西光法師ヲヨビトリテ、八條ノ堂ニテヤ行ニカケテヒシくト問ケレバ、皆オチニケリ。

とはっきり記され、また、『百鍊抄』の安元三年六月一日条には、「……成親卿已下密謀あるの由、源行綱入道相國に告げ言ふと云々」、『保暦間記』には「……語ラフ所ノ中ニ多田藏人行綱ト申者アリ、忽ニ心カハリシテ、此事太政入道ニ告セント思テ」と記されているのである。

こうした記事に関してはこれまで様々な検討が加えられ、「密告云々は、行綱没後広まった風評であった」(川合康^②)、『平治物語』で義朝に対する裏切りを働いた頼政を模倣した^③(早川厚一)、この頃、多田庄は清盛の支配下に置かれていた。行綱は清盛の走狗として陰謀の密告を行った^④(元木泰雄)、平氏と院北面との板挟みになっていたか^⑤(松島周一)、など様々諸説があり、行綱の密告自体の有無という事に関しても意見が分かれており、定説には到っていない。なお、『平家物語』では、先にあげたように、密告の場面の場所が西八条となっており、福原での出来事とする『愚管抄』との違いも重要な点として指摘されている。他の文献史料から清盛がこの時福原にいたことは確認されており、この点を考えると『愚管抄』は信憑性が高いと言えるのかもしれない。ただし、慈円の兄の九条兼実の日記である『玉葉』のこの事件をめぐる記事に行綱の名が見えないことも気になる点である。また、年表に付したように、『尊卑分脈』には、行綱がこの件で安芸国に流罪になったとあるが、この点については確認されていない。

いずれにしろ、この行綱の行動をめぐる記述が、この鹿ヶ谷の陰謀の有無を含む実態や真相を探る際の大きなキーポイントになっていることは確かである。

そうすると、行綱の関与を記す史料の性格を考えることが重要であろう。『百鍊抄』は著者不詳の歴史書であり、成立はその内容から亀山天皇の在位中（一二六〇～七四）と推測されており、『保暦間記』も十四世紀半ばの南北朝期の成立とされる歴史書である。『愚管抄』の筆者の慈円のみが事件時に在世の人となる可能性が大きい。ただし、『愚管抄』は、承久の乱の直前の承久二年（一二二〇）の成立とされ、『玉葉』などとは違って、かなりの時間を経た後での記述であることになる。それを考えると、河合説にあるような、行綱のその後の生き方に起因する風評が入り込む余地も大きかったと考えられるのではないかと思う。特に、この『愚管抄』が、近衛家と対立していく九条家と近い立場だった慈円の手によるものであることに注目したいと考えている。この点については後述する。

また、これも後述するように、行綱の行動は一貫して後白河院の意に沿ったものとなっている。このできごとの前後に後白河院の命によって、何らかの行動を起こしたのかもしれない。そういった噂がもたくなって、このような造型になっていた可能性も考慮に入れる必要があるのではないか。

（２）消されてゆく存在

鹿ヶ谷の陰謀である意味でえの大役を果たした後の行綱の描かれ方をみてゆくと、例えば延慶本と覚一本の違いに現れる、流動の様相が見えてくる。

まず一点目は、鹿ヶ谷の陰謀に続く、反平氏運動の第二弾とも言える以仁王の挙兵に加担した源三位頼政の認識に関するものである。延慶本では、「京都二ハ出羽判官光信子伊賀守光基、出羽藏人光重、源判官光長、出羽冠者光義。熊野二ハ、為義子十郎藏人義盛。摂津国二ハ、多田藏人行綱、多田次郎知実、同三郎高頼。……中略……是等ハ皆六孫王苗裔、多田新発満仲ガ後胤也。（巻四・八「頼政入道宮ニ謀叛申勸事 付令旨事」）と、以仁王の挙兵に加担することが期待される各地の源氏の交名が語られる中に行綱とその子たちの名前もあがるのであるが、覚一本では、「……まづ京都には、出羽前司光信が子共ら、

伊賀守光基、出羽判官光長、出羽藏人光重、出羽冠者光能、熊野には、故六条判官為義が末子十郎義盛とてかくれて候。摂津国には多田藏人行綱こそ候へども、新大納言成親卿の謀反の時、同心しながらかへり忠したる不当人で候へば、申に及ばず。さりながら、其弟多田二郎朝実、手島の冠者高頼、太田太郎頼基、……」（巻四「源氏揃」）となっていて、行綱はいることはいるけれども、鹿ヶ谷で裏切った奴だからだめだと切つて捨てられている。

二点目、巻八の義仲が後白河院を攻めた法住寺合戦の場面では、法住寺から落ち延びてゆく後白河院方の武士の中に、「南ハ多田藏人行綱已下、摂津、河内ノアブレ源氏ドモ」（巻七・廿「肥後守貞能西国鎮メテ京上スル事」）と行綱の名前があがるが、覚一本では、「摂津源氏」と書かれるだけである。この法住寺合戦で行綱が後白河院方に加わっていたのは事実で、覚一本の「摂津源氏」も行綱のことを指しているのは間違いないのだが、名前が記されないのは注目すべきであろう。

三点目の義経を追補する場面では、延慶本でも、「摂津国源氏」となるのである。既に述べたように、豊島冠者も大田太郎も、摂津源氏とは言えない。諸注釈においても、この「摂津国源氏」は多田行綱であろうとしているように、ここでは、行綱の名前のみが消えていると見ていいと考えられる。覚一本でも「摂津国源氏、太田太郎頼基」とあって、延慶本と同様の記述なのであるが、頼政の台詞や法住寺合戦後の描写における延慶本の記述との違いを考えると、延慶本においては朝敵と戦った戦闘シーンのみ名前を消したと見ることもできるのである。

延慶本と覚一本の比較のみであるし、また、現在の研究状況を鑑みれば必ずしも延慶本の本文が古態を示すと言い切れるわけではなく、名前の有無というのも些細な変化と言えるかもしれない。覚一本の成立時にはすでに細かい人間関係がわかりにくくなっていたことも考えられるであろうし、さらに言えば内容に違いが出るわけでもないのではあるが、やはりこの変化は気になるところである。行綱についての人物造型の方向性が進んだものと捉えていいのではな

いだろうか。

(3) 坂落の史実をめぐって

そのように、次第に行綱の名前や存在が消されていく傾向が認められるとしたら、最大の存在の存在の消失は、一の谷合戦記事に関するものだと言えよう。

『平家物語』の巻九で描かれる一の谷合戦においても、最大の山場は何といつても義経が決行したとされる鴨越からの坂落としてである。搦手の大將軍であった義経が、一の谷の海岸に陣をしいた平家軍の背後の急斜面から馬で急襲して平家軍をほぼ壊滅状態にし、後の壇の浦まで合戦は続いたとはいえ、ほぼ勝敗の大勢を決したとも言える大勝利を収めたと言われる戦いの記事である。

しかし、この記事についても、近年、義経はどのような急襲は行わずに、西側から海岸線沿いに迫っただけであったとされ、実は、もともと清盛が福原と京都を問題なく往復できたのは、行綱との関係が良好だったためであり、その行綱が平氏を裏切ったあとのこの合戦においては、彼が現在の鴨越から六甲山系の裏側に出る道を通り、福原に戻ってきていた平氏の主力を背後から攻めたのが源氏側の勝因だった、とする見解が出されたのである。

有名な義経の坂落としを否定するこの説は、一般にも驚きを持って紹介されている。この説の根拠となるのは次の『玉葉』の寿永三年(一一八四)二月八日条だけなのであるが、従来から矛盾するとされてきた、鴨越と一の谷の位置関係などの問題を解決するものであり、『玉葉』の史料としての信憑性などもあり定説になっていると思われる。

八日。丁卯。未明、人走り来タリテ云ハク、式部権少将範季朝臣ノ許ヨリ申シテ云ハク、コノ夜半バカリ、梶原平三景時ノ許ヨリ、飛脚ヲ進メ申シテ云ハク、平氏皆コトゴトク伐チ取り了ヌト云々。ソノ後、午ノ刻バカリ、定能卿来タリテ、合戦ノ子細ヲ語ル。一番二九郎ノ許ヨリ告ゲ申ス。

〔搦手ナリ。先ズ丹波城ヲ落シ、次ニ一ノ谷ヲ落スト云々。〕次ニ加羽冠者案内ヲ申ス。〔大手、浜地ヨリ福原ニ寄スト云々。〕辰ノ刻ヨリ巳ノ刻ニ至ル、猶一時二及バズ、程無ク責メ落サレ了ヌ。多田行綱山方ヨリ寄せ、最前二山ノ手ヲ落サルト云々。大略城中ニ籠ル者一人モ残ラズ。但シ、素ヨリ乗船ノ人々、四五十艘バカリ島辺ニアリト云々。シカルニ遁レベカラザルニヨリ、火ヲ放チ焼ケ死二了ヌ。疑フラクハ内府等カト云々。伐チ取ルトコロノ輩ノ交名、未ダ注進セズ。ヨツテ進ラセズト云々。劍爾内侍所ノ安否、同ジクモツテ未ダ聞カズト云々。

今、この説に従って、行綱に注目する立場から改めて考えるならば、なぜ、『平家物語』で行綱の名が抹殺されたのが気になる所であるのだが、むしろ、義経の造型の問題から、「義経の華々しい活躍とされるのは、義経が一の谷の合戦以降京都に留まって、彼の語る情報が都の貴族の間に蓄積されていたからである」(川合康)^⑥、「軍事の天才として義経を描く『平家物語』にあつては、行綱の華々しい功績は義経の戦功に吸収され、その影響を受けた『吾妻鏡』も同様の結果となった^⑦」、「その結果、『平家物語』では、すべての戦場を「一の谷」に引き寄せて、この合戦を「一の谷合戦」として描き出すこととなり、実際には直線距離で一〇キロメートル以上離れている大手の生田森と搦手の一の谷を、近距離であるかのように圧縮して描かれた」(鈴木彰)^⑧、などと説明されてきている。

どれも納得できるものではあるが、行綱の側から考えるならば、やはり、かれの裏切り者としてのイメージが大きかったのではないだろうか。すでに述べたように、延慶本から覚一本への流動の中で、行綱の名前は消されていく傾向にあるのだが、そうした行綱についての人物造形の根本的な方針のようなものが、ここで、最大の創作を後押ししたと考えられるのではないかと考えている。

四、多田行綱の造型の背景にあるもの

―後白河院との関係と近衛家との関係

さて、このように見てきた『平家物語』における多田行綱の造型の背後には、どういう歴史的事情があるのであろうか。今回筆者が注目したいのは、後白河院との関わりと、近衛家の人々との関わりである。

多田行綱は「風見鶏」と評されることがある。『平家物語』や『愚管抄』で描かれた、鹿ヶ谷の陰謀での裏切り者のイメージが強いのもかもしれない。また、一の谷合戦における彼の行動も、前述の通り、平家への裏切りと言うこともできる。確かに、年表を見ても読み取ることで、彼の後白河、清盛、義仲、後白河とたびたび帰属先を変えた生き方は、一人の主君に忠実に仕えるといったものではない。しかし、その行動を、すべてが後白河院のための行動だったと解すれば、きれいに説明がつくのである。多田行綱は、京武者の一人として、最後まで後白河院の意を受けて行動したと言っているのではないだろうか。

もう一つ、今回、着目したいのが、近衛家との深いつながりである。先に、行綱の生年がわかる史料として掲出『兵範記』仁平三年（一一五三）七月十六日の記事は、行綱が、近衛基実邸で元服の式を行ったとするものであった。この記事は行綱の名がないことからこれまで注目されることはなかったが、元木泰雄氏が紹介している⁹⁾。

先にも述べたように、この「非蔵人頼盛子」が多田行綱であろう。十一歳で元服という内容を信ずるならば、年表にも記したように、行綱の生年は康治二年（一一四三）となり、基実と同年生まれということになる。基実自身の元服は、久安六年（一一五〇）十二月二十五日に近衛邸で行われたことが、『台記』などに見える。この時八歳であった。この記事の中で、取次など行綱の面倒を見ている、平信範（『平範記』筆者）や加冠役の源信時などは、ともに忠通の家司である。

基実と乳母子だという記述は見つからないものの、同じ年の生まれの男の子をその主の屋敷で元服させるとするのは、やはり、そこに並々ならぬ深い人間

関係を見るべきではないかと考えられる。そして、その基実が早世したあとで、その長男の基通とも深い関わりを持っていたと想像することも外的外ではないのではないだろうか。

そして、その基実が、清盛の摂関家と結ぶ政策の一環として、その女の盛子と結婚したことはよく知られている。また、その基実が仁安元年（一一六六）に急死したあと、幼少だった基通を後見するという名目で未亡人盛子が基実の遺領の大部分を伝領したため、基通も平氏との関係が深く、清盛の女の寛子と結婚した。一方、その容姿などから後白河院の寵愛を受け、寿永二年（一一八三）の平氏都落ちの際には、その計画を後白河院に告げて、院が平氏に同行させられるのを防ぎ、後鳥羽天皇の践祚に伴って、後白河院が九条家の兼実などを退けて摂政に即けるが、平氏滅亡後は、源頼朝と結んだ九条家の兼実が摂政になり、後白河院の死去で後盾を失う。

そのように考えると、行綱の行動の背後には、【後白河院―基通（基実）―行綱】というネットワークのつながりの強さあり、後白河院と近衛家への忠誠が行動原理だったことが推測できるのである。

さらに、そうした基通と九条家の人々との関係の悪さも気になるところである。九条家の人々の書き残した言葉からは、基通ら近衛家の人々に対する敵しい敵意のようなものが感じ取れる。例えば、『玉葉』寿永二年八月二日条には、以下のようにある。

伝聞、摂政ニケ條ノ由緒有リ、動揺スベカラズト云々、一ハ、去月廿日比、前内府及ビ重衡等密議ニ云ハク、法皇ヲ具シ奉リ、海西ニ赴クベシ。若シクハ又法皇宮ニ参住スベシト云々。此ノ如キ評定ヲ聞キ、女房（故邦綱卿愛物、白川殿女房冷泉局）ヲ以テ、密ニ法皇ニ告ゲ、コノ功ニ報イラルベシト云々。一ハ、法皇摂政ヲ艶シ、其ノ愛念ニ依リ抽賞スベシト云々。秘事、希異ノ珍事タリト雖モ、子孫ニ知ラシメンタメ記シ置ク所也。

同 十一月十七日条

摂政召シニヨリ参入シ、今夜宿シ候ハルベシト云々。コレ御愛物タルニ依リ、殊ニ召シニ応ズルナリ。

この「摂政」が基通である。基通が、平家の宗盛と重衡が都落ちに際し後白河院の同道を図ったことを耳にし、後白河院に告げることと未然に防いだ事と男色の関係によって、ことに重用されていることを「希異ノ珍事」であると子孫に書き残そうとしているのである。翌十八日にも同様の記事が有る。

一方、慈円も、『愚管抄』において、次のように述べている。

……日本国ノナレル様今ハカウニコソトテ、攝籙臣コソ如此ハサタスルコトヲ、山ヨリクダラセ給フマ、ニ、近衛殿撰籙モトノゴトシト被仰ニケリ。一定平氏ニグシテ落ベキ人ノトマリタレバニヤ。又イカナルヤウカアリケン。サレド近衛殿ハカヤウノ事申サタスベキ人ニモアラズ。スコシモヲボツカナキ事ハ右大臣ニ問ツ、コソヲハシケレバ、タゞ名バカリノ事ニテ、庄園文書マ、母ノ我ヨリモ弟ナリシガ手ヨリエタル由ニテ、清盛ニカクシナサレタル人ニテアルガ、猶カクテアラ（ハ）ル。イカニモく人ハ心エヌコトニテアリシヲバ皆心エラレタリ。カウ程ニミダレン世ハ事モイハレタル事ハアルマジキ時節ナルベシ。大方撰籙臣ハジマリテ後コレ程ニ不中用ナル器量ノ人ハイマダナシ。カクテコノ世ハウセヌル也。

……（清水・義仲の推挙により、松殿基房が実権を握ったので）近衛殿ハホロくト成リヌルニテアリケレバ、法皇ノ近衛殿ヲイカニモくイトヲシキ人ニ思ハセ給テ、賀陽院方ノ領ト云ハ、近衛殿ノテ、ノ中殿賀陽院ノ御子ニナリテツタヘル方ナレバ、ソレバカリヲバ近衛殿ニユルサルベシヤト、ソノ世ニモ猶院ヨリ仰ラレタリケルヲ、シカルベカラヌヤウニ返事ヲ申サレタリケル、クチヲシクヲボシメシタリケル也。（巻五「安德後鳥羽」）

この痛烈な口吻は、やはり九条家と近衛家の関係を抜きにしては説明がつかないのではないだろうか。

ここで思い出されるのが、先ほどの鹿ヶ谷事件の行綱の密告の真偽である。先に述べた川合説のような、行綱の密告が事件後広まった噂だとする考え方が真相であったとしたら、その噂が『愚管抄』に書いてあり、慈円と深い関わりの中で成立したとされる『平家物語』に当初から取りこまれたことを考えあわせると、実証できることではなく、大胆な推測にすぎないかもしれないが、そこに基通を介在した行綱に対する慈円の感情を見なくなるのである。

まとめにかえて

多田行綱は、戦乱期の京都の複雑な人間関係の中、おそらく彼なりの正義によって、一貫して後白河院や近衛家のために行動した武士の一人だったと思われる。その中で、特に後白河院の、対平家、対源氏の複雑な動きが彼自身の動きを、時には裏切り者に見せ、時には風見鶏のように感じさせたのであろう。冒頭でも述べたように、そうした事情が物語の中に書き込まれることはなかった。しかし、行綱に施された物語における造型は、丁寧を追っていくと、背後にある彼が生きた時代の様相を浮かび上がらせるものであった。これも一つの「歴史叙述」であると考えるのである。

引用本文一覧（私意により、濁点を施すなどの改変を行ったり、書き下したものがある）
 覚一本『平家物語』 岩波書店 新日本古典文学大系／延慶本『平家物語』
 汲古書院『校訂延慶本平家物語』／長門本『平家物語』 勉誠出版／中院本『平家物語』 三弥井書店、中世の文学／『愚管抄』 岩波書店 日本古典文学大系／『百鍊抄』『吾妻鏡』 国史大系／『玉葉』 国書刊行会／『保暦間記』 和泉書院『校本保暦間記』

〔注〕

- (1) 『平清盛 福原への夢』(講談社選書メチエ、二〇〇七)
- (2) 『平家物語を読む』吉川弘文館、二〇〇九
- (3) 『平家物語を読む』成立の謎をさぐる』和泉選書、二〇〇〇
- (4) 「多田行綱と源義経の挙兵」『市史研究』さんだ、二〇〇七
- (5) 『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇
- (6) 「生田森・一の谷合戦と地域社会」『地域社会から見た「源平合戦」』岩田書院、二〇〇七
- (7) 川合康、注(6)に同じ。
- (8) 「一の谷合戦」の合戦空間」『平家物語の展開と中世社会』汲古書院・二〇〇六、初出二〇〇〇年 など
- (9) 注(4)に同じ。